

特44

553

黃門記八幡大衆
立号

刺馬珍敷 片立券 華本文昌堂印

後承香花紙ハ
八陣の脚色
他異道書ハ
新編の意編

菊池家傳大敷

改訂川島原
是書ハ
新編ハ
菊池家傳大敷

劇場珍報 第五號

道頓堀角の芝居小春狂言 黄門記八幡大鼓 本讀の聞書

第壹番目(大序)水戸邸門外の段 寛永年間常州水戸の城主中納言頼房公の落胤鶴松丸(中村)の父が招きよ依て幼き時より成長の養育を受くまゝ一京師の商人松屋又左衛門(中村)と伴に東都へ來り小石川水戸邸門外に案内を請ふと雖も深夜の事故衛門の士卒通行と免さざれば是より依り英勇大度の鶴松丸の智辨を以て拒む諸士(大勢)を解伏せ遂に開門す處此道具替と(同館の段)頼房卿(市川)の鶴松丸の無悲に都方着到せし事を悦び早速御父子對面の儀と仰出され先づ名乗の盃より鶴松丸が才智を試み觀るに一を聞て萬を悟る非凡の賢才 實大人も及ざる品行哉と拍手で大層感悦れ養育せし又左衛門 恩賞の盃と賜る件々更に鶴松丸を以て水戸家の跡目相續に爲さんと勸むを共兄弟の義する事を重んじ別腹の兄鶴千代丸(市川)と敬ひ該身の舍弟の事故跡目の儀の困難と辭事互に家督相續の爭論と成る依て頼房も是非なく(兄)鶴千代を相續人と爲し(弟)鶴松丸を分家 定める段に幕(同序の切) 將軍家徳川

營中の段 爰に嫡子鶴千代が父頼房の名代で鶴松丸を伴ひ登城爲して大榎(三代)家光公へ御目見へさせ處 家光公(源の助)の世評は倍せし鶴松丸が器量と感得らるる諸州高松にて拾二萬石を宛行ひ西國騒亂の豫備と任す事々家光の一字を賜り自今光國と名乗べし 仰せらる、徳亮 黄門 西山(中た數)卿が天性の聰敏幼稚と雖も衆も勝し名譽と見せる脚色の發端なり

○是より貳拾餘年を以て徳川四世將軍時代の狂言とある看官其思召

(二段目)の金襴に翠簾屋臺管弦の合奏にて幕明くと將軍家御病床の段 即海波風静かある徳川四代の大將軍 家綱公(市川)の此程より重死病の御不例ゆへ跡目の嗣君と定めんと殊お必勞あさる、處已が企に五大老酒井雅樂頭忠孝(實川)の是幸ひに謀叛を興し近從の諸士迄遠ざりて漫に病床へ入を免さぬ折柄稻葉石見守(中村)と云ふ忠臣の「雅樂頭の胸中台點行の志 不審り密に御腦の様子と伺わんとする件々(鳴物替り太榊あ成り)終に將軍家綱の五臟の腦に遺言を演るも苦一を御容体」

樂頭の料紙取出し心の企て認めて苦痛の君が耳近く「上御遺言の程正に黄門八郎卿へ御傳へ申で五坐るる」一言より御判を取出し君の御手も持せッ、首尾克く捺印受る處にて幕

(三幕目)の營中大評議家細答の段 本舞臺一面廣中大廣間の拵へ本行の合方サヒ

タシくにて幕明くト△承わきお御常代御大切ノ達一に依て口御家門其外○大小

名委く今日登城めさる、ノ事と例の上下大勢出向ふ所へ尾張大納言(鰻)を始め宰

相綱吉卿(源)紀伊中納言(猿)松平讀岐守(十郎)板倉内膳(正)丸(鬼)井伊掃部頭(友)

稻葉石見守(駒)皆々麻の長上下にて花道を來り會釋しく直に將軍の病床を通らん

とぞる處酒井雅樂頭が拒み刺さへ家細の御他界と秘し又の君の遺言と然り前幕の遺

書を出し三家を始め御家門の諸侯と除け獨斷を以て世嗣を招迎其身一人權を執り威

勢を振んと謀心庭ひて屢々問答とる折柄水戸の城主(せらるゝと手)光國卿(市川)

列坐諸侯の憤氣と宥め光如何に雅樂頭汝高官高録と望辱けなくも東照宮を納置

れ一幾裁を古反は致し往昔鎌倉の執權たる北條を摸範海内に暴威を振ひん其方が謀
企る有字が雅一イヤ黄門卿の仰なれど此御遺言に悖り給わば世上の掟も何ぞ亂の
様に存察られ此義篤と御思慮有く「ヤア申な雅樂頭予が舎し甲府殿も汝が讒言に
依テ御自殺成れし義で有字が是にも何ぞ申開れ有手光亦上様御他界の只今迄汝豈
人事を謀り連枝及三家の内へ沙汰に及ざると如何の譯か雅「サア其義ハ」光「サア」
光「酒井雅樂頭返答ハ」モ有米か「是ニテ雅ハ問答にまけ承伏なして退く跡ハ
皆く御臨終の際お逢はざると嘆き光名殘惜とあ讀「尊厳なり共并せ」皆々「イサ
御病床へと通る件より家細公の弟館林宰相綱吉公(源)徳川五代の嗣君と崇る段
よて幕

(四幕目)の雅樂頭邸宅の段爰へ本多伊豫守(中村)友三(太郎)の兩名が來て
將軍家まよ上使の趣き「雅樂頭忠恭大老勤役中君と欺謀恣に暴政を行ひ一罪案廿五
々條を傳へ若言解あらば承らん」と進ると雖も流石の忠恭言解の術をくハ「五拾餘

年々榮花に引換。積悪遁れぬ雅樂頭。死と以て廿餘ヶ條の申解イザ御見分。一、切腹する
処の詭の太替入に。家族一世別れの愁嘆意に憂る井。上使の兩人顔見合。一、輕からざる
罪に依て酒井家斷絶さす可き処。先祖の武功多に依り家督の嫡子河内守に立させ
る。上特別の御機嫌こゝろつかへ。内意を告げる。上上の御慈悲本多の信義。今更悔むも詮なしと
言つ、絶入處母で道具廻ると安宅丸船藏の場。暴れ丹前仕出のあま。捨壽詞の後正
面の雪幕切て落せば舞臺惣一圓雪降の持へ都て本所御船藏の体なき。一、此安宅丸の
攝戦の後大坂より廻送。秀忠公の御坐船とあり伊豆の濱邊に繋ぎ有しと寛永年中更
あ江戸の船藏の遷置する大層立派な船也。一、爰に大老の跡役堀田筑前守が該船より
りばめ。金銀を己ヶ益になさんと櫻子尾上多。と云藝妓を語ひ彼の船に忍びせて夜
毎よな伊豆へ行々。一、と曰。此処稻葉石見守の仲間右。来り。其所へ來たの
の綾平右。やちへカ。ソウ言ふ手前。此雪の降のに。ア何として居の。外宏
お子。此頃噂の高船の泣聲何でも是より子細が有ふと彼正体を見届ケ。來堂の

と咄。中は彼の船の中よさもやさしき女の聲して。伊豆へ行々。伊豆へ行々。伊豆へ行々。
ひノウ泣聲。折柄あたりを見廻。櫻子の手掛を吹流。一、おかひじ。人無き間にそぞろや
く。行の、る処綾。安宅丸の正体見認。一、はらく此場を。カレ花道エ。コケユク
拵平右。綾平延。の兩人大雪の爲あひまふの見へぬ体。此見エ。よろしく幕
一、五段目。堀田邸庭先雪賣の場。筑前守正俊八。が奸計安宅丸を焼捨んと事八分
迄至りしを櫻子が見認らる。故彼と其儀置時。己が企も洩んか。戀に事寄。傍女お言
附ケ。櫻子を雪中。堀コ。櫻無情者の廊の女郎と風雅に流し唱歌の聞や左程迄母の
餘もあつ。情と掛し。予の誤。一、イヤ。櫻子。一人の男の操と立る心あらん。昔の常
盤を知らずや。操と破て操を立。一度伏見の雪の夜。雪と墨染小町なり。末の下賤の。ソ
レ死。黒白分つ返答セ。上。清盛ならぬ正俊。白眠眠の太陽も招き戻せ。十如くあり。
是方責に渡れ。櫻子とつ。以前の拵平彼を捕へて聞糺さん。暫らく挑をも合
に入きて捨お行く姿をさとり。傍への泉水へ。サシ。落入る此件。道具ぶん廻すと隅

田川の段爰、橋場の漁師仁藏(十郎)と倅政藏(九郎)親子連が小船の船先お篝火焚死

上手が出で一網入れ引揚見ればコソ如何に未だ散のぬる(櫻)の死骸(上)「コソヤ」身体

に温み有(敵)「コソヤ」未だ死の物もチエノカ(兩人さま)介抱して連歸る段に幕

(六幕目)の下給の國八幡不知散際(段)霞柳引裏間より翅と上かて白鳩の番にあ

らぬ二羽三羽敵のみあまへ飛かふ(此上る)水戸黄門光國(右)近習松平主膳

(源)結城數馬(太)今井頼母松尾小膳山田朝倉林田舎人朝比奈彌太郎(外)大勢の下都

庵主雲念(友三)お八幡さまと何故のと問ふ事(上)「おつらう」魔道を見死せり

んと敵の内えぞ入玉ふ是にて舞臺廻ると造り物打放さるやぶさうと〇ぐるり一圓

本竹と置り都て八幡やぶの内のもよう近習のさむい道に「コソヤ」事有く居所返し

光「是に任して五六里の道を歩行と思へに猶行先も敵の中(と)ソリヤ身連て本舞臺

とくり、眞の水、澤山出る、雨、車、是がハ、怪一やナアトウソキよふの「尻居に

雷の音はげしく大「ロ」お成を、はやりにあり

成所「コソヤ」竹の毒を書き道具幕「サモン」此間「サカ」有く切テ落セハ〇平舞臺一面大

真中に竹盡一の神社「サ」有て頗るさびし体也「爰へ」鼓歌「鼠」メメの十二單衣「下」

髪(の)女神と異行の姿冠を著く笏を持し男神黄門の傍へセリアケに成事社の内

空叔仙人(八百藏)問答に及び終に立廻りに(仙)「サ」汝の疑ひ晴れし上

成て黄門の大地へ「ハ」ツツと投がられる頗る正念場あり(右)の光國のセリサケにあ

イテ元の所へ歸すべ(八)の仙人の宙へ上る物まで段々是と又所返して

幕明の道具に成ると光國を以前の近習が介抱してセリ上げにあり(皆)

我君お心が附まじさ(此聲)「コソヤ」光「眼」と此敵え入る事を禁すと云建札して歸る折と

(光詞)「猛のに」天搔曇と咫尺も分たぬ暗黒世界(是)「エ、」と顔見合を木頭

に幕

(七)目)橋場の総泉寺門前の段爰は堀田へカマンの漁師大喉不敵の敵藏(九郎)と

ベラ坊主雲念(若)が彼櫻子と捕へ堀田へ差出し褒美よせんと挑む處え來合を浪人

(梅丈)突然悪漢を投伏てきり(櫻)「ヤ」貴君の我夫(光)「ホ」其方へと互に驚く不思

儀の對面絶て久しき其間へと種々物語とる處にて道具替る(上)爰の所も橋場の漁

師枯た櫻子秘助て敵ふ心も仁藏が住居意も正香光太郎武重(丈)の主君へ歸參の手筈

を得んと一泊ありて當家の様子伺ふ内娘小萩が戀幕の返辭に困る折みそわと血の

る首を引擧て主の仁藏(一)ドツカト坐る。コレヲと驚く光太郎。小萩も胸くりコレ父上
何故に兄さんと是よりまのふ仁「サア不仁な子程可愛ひの都て浮世の親心あを共非
道十悴也へ打取て貴君の望と又二ツにハ娘小萩の願と光ハ合點の行ぬ望との
是々霽の内に(光、櫻)の総泉寺前での話と立聞せし光ハ「切の最前櫻子の話に違す鐘
事元ハあさの家來筋と信義を重る仁藏はあしに」光ハ「切の最前櫻子の話に違す鐘
が淵ある彼の釣鐘を引揚玉ふ光國卿と沈めに掛ん所意なりまう一ハ此上ハ親父
メの悴の代ハ光國卿を沈めに掛んと組あ入。堀田が家來を欺ひてスワと言時委とく手
箸と狂としお手柄させん光「其詞に違とねば小萩の節ある心に愛目出度主家へ歸參の
後呼迎へて左右の花聞あ悦ぶ小萩(一)より櫻子中へ進み出。ツイ一ト通事の中で
あし便り抄ひ妾の身是のうハ眞實の姉と妹と思ひて中より下さんせト開く。
話の央ハ早手が大聲「明日ハ彌く黃門を沈めに掛るが都合ハ好のト聞くと光太郎氣
を急立ち主君の邸へ注進する処ハ例のハタハ送三重にて幕
(八)目(一)稻葉家與御殿夜中酒宴の模様當主石見守(一)列坐近習腰元と違さる。案

老夏目茶左工門(猿藏)局並川(萬の助)の兩名に向ひ稻「其方達も知る通り先年勘當
せし正禾光太郎夫婦の者ヲ今更不惑と思ひ一故一ツの功と立上ハ勘當敵得させ
んと綾平と以て言傳へる予が内命兼て隅田の邊を探偵させしに豈計らんや今霽の
注進(此間胡弓)夫故に其方達迄夜中の出仕大義と有ツロ茶「ハハハ予がチト思ふ
子細有て認し此書翰是々直に届呉ヨト立のける茶「アイヤ暫らく」茶「今霽に眼る
貴君の的の中「包ませぬ明一(兩人)下さり升ふ」ハ、適を兩人余が心と推量せし上ハ何
を隠さふ今茶右工門へ渡せし水戸殿宛の一對ハ此石見守が辭職の願ハ「エトト兩人
驚き」スロヤ君ハ重役辭職有て並明朝登城ハ被成ませぬの」イヤ登城ハ致す隠居
の身あて彼の大老ヲ「○アノ堀」アコトヤト小聲母あぞ稻「日外酒井雅樂頭切腹後天
下の重役ハ堀田殿に任せし処始めハ替る非道ハ勤國家の百務自儘に成し隨ハ暴威を
振ふ而已ならず安宅丸(一名風)と取潰し其金銀掠奪あし又京都の大佛殿を取潰して
其銅金と横領あせど誰一人咎むる者なく面に忠義を見せし子孫を徳川の世嗣にあさ

んと謀る彼が計策天草の殘黨を始め興あす者も數名あきと實門光國卿在世中の中
 以て手も出し難し。是に依て明日隅田川にて卿を害せんと彼が企み又先刻の觸出し明
 日の物登城の光國卿の御船間近く大小名を立寄せぬ奸謀あらん故に實門卿を陰に守
 護し堀田へうたんの惡黨と皆殺にすべしと手術の正采に云合されと猶其方達も注意
 致せずの隙中ふく正俊を只一刀にト切真似とする兩人感きて詞無く今に始めぬ君の御賢慮」コッヤ
 石見守の命を斷りて天下の爲トヤヤイ（兩人）ハ、ア「是よく主従一世別色の愁嘆
 兩人左右の袴のヌツと持ちかあしむ（稻）キツト成て「末練で有ふツ（ナロム）ギイ
 同石見守屋敷内中間長屋の場 上「冬枯も花の吹雪に身を厭ふ風とへだての障子さ
 へ破れて薄氷綿入の姿も搦ぬ拵平が忠と孝とに二合半とらぞ還るも母親え、此淨
 留璃の内綾平が來て御家老茶右衛門様の仰にいと隅田川へ加勢も行く事と密に語る
 夫々拵平の態と女房お浦（多）に愛想がツキ杉松連て出てウッロと常と替り一夫
 の詞諫説れを聞入も泣の泪に盲目の母親（友）三止れと止ぬ鉄石心忠義の爲母の親も子

も捨て駈出す此世の別れ此恋愛の愁嘆ハ一日の内無類の世話場泪母袖を濡し玉ふナ
 同外通り窓の所緩ハ以前の綾平が拵平を介借して漸々窓から駈脱す也（馬）兩人の者
 まて（右）ハ、ア（馬）「主親ハ見限と邸に立退く汝等の心庭石見守急度禮を〇イヤサ急度
 成敗致と者れおと其儘免して勘當致す」スッヤ我とを（馬）「ナ、サ七生迄の勘當もへ心
 置なく鐘が淵までイヤサ兼テ兩人が忠義の魂過分に思ふツヨ（右）ハ、ア身に餘る君
 の仰、平伏（馬）「二人の者、兩「殿様、主従ハ三世じやとイ（ナヨム）拍子幕
 （大詰）上「追く行爰ハ所も名に一をふ武藏の國と下総の中と流れし隅田川空吹風
 お小浪うつ鐘が淵の深み成る船の庭意も白水の浮べる榮花に堀田の家來光國卿を害
 せんし用意の者ども揃る折柄企みの裏と播合と漢屑と共小舟子どもト賑やかな離都
 堀田の家來荻の軍次（殿九郎）ハ光太郎拵平綾平の三人に追はれ皆泳は來る又早手
 蕨（團）六（三）真（三）杯も來て水庭の大立廻りに成ア軍次の首打取て上手の岩臺へ登
 るト正面の向嶋遠見の書割に成く其儘上へせり上る跡の黒絲切て落せば更ハ浪の

遠見舞臺の真中より大釣鐘懸れ其兩脇へ林平、綾平、突立居る。又龍頭の上に毛綱を掛て光太郎の立字儘、エンヤ、大勢の人足引とセリ上に成る。又花道を漁師仁藏が堀田の家來津村郷太夫を組伏てセリ上リ、本舞臺にて一ト刀切附きは、大ドロ、よて水中。大勢の模様烈しき鳴物にて龍頭場、長ふある是故皆苦しむ處にて涙幕落る。次、看官が待兼られ、舟の場。正面に大層十脚坐船、尤三ッ槳の紋を附する紫の幕を張真中、小黃門、光國、御イみ、辺習、大勢列坐る。爰へ以前、(光)仁、來り堀田の家來を打取する。予紅を演べる折柄、又爰へ考坂、壹岐守(八百藏)が小舟で來り、只今營中大廊下は於て稻葉石見守、備大老堀田筑前守と、刃傷不及、及び則ち彼を差出す。書面「光國是を見て堀田が隠謀を惡と天下の爲に一命を捨、石見守が忠死、憐と稻葉家本領安堵の吹舉とあり、且下賤に似合ぬ、非平、綾平、仁藏の三名が忠義と感、ト殊に光太郎夫婦の勳功と賞して高懸と給る仁慈の斗らひ、善人の昌盛壽く、松平日二度爰に隅田川盡せぬ名譽も徳川の鳴物替つて、天下大平に成る意味。爰へ坐頭が、是が切狂言所作事の始り。妙案ニテ最、面白、脚色なと大層好評判。

○扱該作者の新狂言の魁頭有名なる佐藤宮三郎大人と勝、勝藏、善名彦助、大人の妙案ニテ最、面白、脚色なと大層好評判。

切狂言 手向秋七種法高教

故市川小團治十三回忌 追善の所作事

○家昇の實父が唱采を得し天津乙女の舞曲を例の宙釣とを目新しく脚色數十の燈籠の内より顯れる風景の頗る奇麗を打扮にて極樂世界も斯わらんと看官を感じさす。又三ッ星の一人助藏の舞の有て引返し、幕無一、屋臺拍子賑うな鳴物正面、天満宮正遷宮の模様と東京諸新聞も評判の高ひ隅田川の流燈會に基きし趣向にて座中残り老手踊になる其内役者替名の概略。船頭米藏、右團治、俳師延山、(八百藏)秋田、豊(殿十郎)、葵間梅八(駒の助)、藝妓小たの(多賀の巫)、さむこ持舛八(源の助)、船頭海老六(猿藏)、仲居おせん(殿太郎)、藝妓柳吉(團の助)、仲居わづ(馬の助)、舞子小樹(助藏)皆好み、の衣装にて花美な舞に成り千秋樂の(ッ、リ)狂言。先今晚は是切と目出度打出し評判シヤ。

○當號の存外紙數が殖まいた故前號謎の解と心の次號に譲り舛

○北濱の照影堂先生に白す 大ひある哉珍報の功、又、八文字屋云々と

「身ニ餘ル公ノ祝詞」 「恐縮至極よふんじ舛る

○江湖投書家 謎に限るを當り狂言に寄る歌、俳、川柳、都より一、冠附の御趣向

諸先生へ謹々乞ふ が出来まゝに御郵送下され尤懸許に係るを専一とす

明治十一年十月十六日出版御届

大阪府平民

同 年同月三十日刻成出版 編輯兼出版人

華本安治郎
第二大區九小區難波新地
貳番町八番地

府下最寄大取次所八幡筋玉置○堂嶋靜雲堂○御靈前松本○天満天神前大清○本町岡

島○心齋橋通富士政○西京ハ新京極通太田權○尤諸國の本屋繪草紙屋にも有り

道頓堀 尾張屋 稻正竹 勿論此外の芝居茶屋にも有之候(定價貳弍五厘)

芝居茶屋 近吉安泉 大吉大 假製本局 南地中筋法善寺南横町廿三番地

高砂 儀正 假製本局 華本文昌堂

